



ぐんぐんすくすく! 相生っ子!

住所 相生市緑ヶ丘4丁目5-5
 電話 0791-23-5070
 FAX 0791-22-7211
 E-mail ikusei-aioi@bz03.plala.or.jp



◆『いじめ防止サミット』を開催しました。 <8月25日(月) なぎさホール中ホールにて>

市内小学生14人、中学生15人、そして小中学校の生徒指導、児童会・生徒会担当教諭など20人も加わり、兵庫県立大竹内和雄教授の指導のもと、8人の大学生のサポートを受けて開かれました。

3時間半にわたり、互いを知り、一緒に考え、自主的に発言し、他の考えを聞き、またさらに考える、といった具合に、見ていても大変中身の濃い時間でした。



身を乗り出して積極的に発言する児童



先生たちも子どもたちに負けじと真剣



最後に感想を述べる小中学生

参加できなかった先生方や保護者の方々にも聞いていただきたいと感じるほどの良い感想でした。
 3時間ちょっとの時間でしたが、全ての子どもたちが、「すごく成長したなあ」と思いました。

サミットの実際の様子や話し合った内容等は、第45回相生市青少年健全育成市民大会(令和8年1月25日開催予定)でより詳しく報告する予定です。

みんなで幸せになる

「なぜかきらわれない生徒指導」(前 哲央著 東洋館出版社)より抜粋

いじめが起こらない土壌をつくることのできる先生は、もちろんいい先生です。いい先生であるだけでなく、人気もあるでしょう。「私はいじめを許しません」という態度を貫く先生、いじめを訴える生徒がいたらきちんと聞いて、きちんと対応してくれる先生であることが重要です。

でも、「いじめは許しません」といくら言っても、そもそもいじめに気がつかないようでは、意味がないかと思います。生徒からすると「いじめを許している」のと何ら変わりはないのですから、そして、逆にいじめの土壌を自分でつくる先生は最低と言わざるを得ません。

そして、いじめに気がついた生徒が「悪いことはダメ」と自信を持って言える集団、そしてみんなが悪いことを改めようとする集団、良いことをしていこうとする集団、そんなクラスにいる生徒は幸せだと思います。

こうした循環のもと、学級に関わるみんなが幸せになっていくことは、先生と生徒のためだけではありません。保護者も安心します。そもそも、保護者は学校の内実がなかなか見えません。中学生ぐらいの年齢の子は特に、学校や友達のことを家で話さなくなっていますし、中学校に対する先入観があれば、なおさら保護者は子どもの学校生活が不安でしょう。

そんな時、子どもに「学校はどう?」「楽しい?」「先生はどう?」と聞いたとします。返ってくる返事が「楽しい」とか「大丈夫」であってほしいのは当然の親心です。そして、「先生のことは好き」という言葉を聞くと、保護者は先生を信頼できます。生徒が学校のことをどのように話しているかは詳しく分かりませんが、懇談などで保護者に「この子は先生のことが大好きなんです」と言われることがあります。そのようなときの保護者の話しぶりを聞いていると、こちらを信頼してくれていて、安心していていることが伝わってきます。

保護者が子どもに「学校でいじめとかないの?」と聞いたときに、もし「大丈夫」「そんな子は先生が許さないから」と子どもが答えたりすれば、保護者は安心して、先生に対する信頼が大きくなっていきます。



子どもに笑顔で言おう「失敗してもいいんだよ」

OFFICE KAWAMURA 代表 河村 都

今日は私が保護者向けにお話ししてきた子育てのポイントを四つお伝えします。

一つ目は「わが子を他の子と比べない」です。

「比べるのは他の子とではなく、昨日までのわが子です」「スマホのレンズからは子どもが輝いている姿は分かりません。皆さんの目でわが子が楽しんでいる姿を笑顔で見つめて、心に焼き付けてください」と。

実は、私の娘は幼稚園児の頃、誕生会で名前を呼ばれても返事が出来ず、ステージに上がることも出来なかったのですが、翌年の誕生会ではちゃんと返事をしてステージに上がれました。「今」できる、出来ないは気にすることは無いのです。

二つ目は「子どもの背中にはあんまり重いリュックを背負わせない」です。

小さな子どもが毎日重いリュックを背負って歩いていますが、これでは楽しく歩けません。そのリュックにはいったい何が入っているのでしょうか？三つくらい入っています。ちよつと見てみましょう。一つ「親の期待」、二つ「親の要望」、三つ「親の価値観」。これらがあんまり重いと、自分の足で自分の道を歩くこ

となんかできません。

お父さんお母さん、思い切つて子どもの背中からリュックを降ろしてあげてください。身軽になった子どもは自分の行きたい道を探して楽しさを経験します。

身軽になると「平らな道よりデコボコ道の方が楽しい」とそつちの道を行ったり、道端に咲いている小さな花をしゃがんで見たり、そこにいる虫を発見したりするかもしれません。

お母さんは子どもの前や横ではなく後ろにいて、子どもが不安になって振り向いたら、笑顔で両手を広げて、「失敗したっていいんだよ」と言つてあげてください。そしたら安心して、また前を向いて歩き始めますから。

三つめは「子どもはみんなバシブル」というお話です。

私が幼稚園の先生をしていた頃、クラスにK君という、いたずらつ子の男の子がいました。私が「教室に入りましょう」と言うとき外に出ていくし、「外に行きましょう」と言うとき教室にいます。お遊戯会の練習の時も、「右手！」と言うと左手、「左手！」と言うと右手を上げるのです。私は「この子がクラスにいないければ、とてもまとまって良いクラスになるの」と密かに思っていました。

ある日、O君という男の子が帰り際に熱が出て、彼はおかあさんがお迎えに来るまでぐったりとして机に伏せて待っていました。

その日は土曜日で、全ての持ち物を自分で鞆に詰めて帰って帰ります。私は「忘れ物をしないでね」と大きな声で言いました。ふと教室の隅を見たら、K君がO君の鞆に彼のスモックやタオルを不器用に詰め込んでいるのであります。そしてO君の机にその鞆を持っていき、「ほら」と投げるように置いてさつさと自分の席に戻ったのです。

私はその光景をただただ茫然と見ていました。そして気が付いたのです。私は彼の表の「チエツク模様」しか見ていなかったのです。彼の裏側にはキラキラ光る「水玉模様」があったのです。その水玉模様は「この子がいなければクラスがまとまる」なんて思っていた自分を反省し涙が溢れてきました。

四つ目は「子どもの躰は親の生き方」です。

よく保護者から「躰をどうすればいい？」と質問されます。躰にはマナーに近いものがあると思えます。だから、いつも大人がお手本を見せてあげれば良いのです。例えば、お年寄りが電車に乗ってきたら席を譲る。その時に「私たちは元気だから立てばいいのよね」と、さりげなく子どもに伝えるのです。親が大好きなものに夢中になっている姿、美しく笑顔で食事している姿、静かに本を読んでいる姿、一緒に住んでいる祖父母と優しく会話している姿、時には疲れてソファで横になっている姿、夫婦喧嘩をしている姿等々、子どもはそんな親の姿や会話をすべて見て、聞いて、感じて生きています。

「かわむら・みやこ」幼稚園教諭として勤務後、NHK番組『おかあさんといっしょ』のお姉さん役でレギュラー出演。その後、洗足学園短期大学にて『表現教育』の非常勤講師、知育情報教室「こどもの部屋」主任講師を務める。著書に『子どもを伸ばす「いいね!」の言葉』『ダメ!』(言葉講談社)、『子や孫に示ばられない生き方』(産業編集センター)など多数

いので、さびげなく子どもに伝えるのです。親が大好きなものに夢中になっている姿、美しく笑顔で食事している姿、静かに本を読んでいる姿、一緒に住んでいる祖父母と優しく会話している姿、時には疲れてソファで横になっている姿、夫婦喧嘩をしている姿等々、子どもはそんな親の姿や会話をすべて見て、聞いて、感じて生きています。だからと言って聖人君子のような生き方をする必要はありません。普通の姿でいいのですが、しっかりと自分の「生き方」だけは持つていて、それを見せてほしいですね。なぜ「生き方」が大事かというと、それが子どもの「生きる力」になるからです。これが育っていないかったら人間は怠惰な生き物だから、楽な道ばかり選んでしまふんです。小さな子どもにとって親の存在はやはり大きいです。子どもは親の背中を見て育ちます。だから、親がどうしているかと言うことはすごく大事なことです。

